

スキーマを意識的に利用した英語学習*

内 藤 永

1. はじめに

日本の英語教育は21世紀を前にして大きな変革期が訪れた。1989（平成元）年に文部省の学習指導要領が大幅に改訂され、中学校、高等学校の英語教育はコミュニケーションに重点を置くことが目標として掲げられた。文部省は、さらに1998（平成10）年に中学校、1999（平成11）年に高等学校の学習指導要領を改訂し、学校教育においてより一層のコミュニケーション能力の向上を目指している。

世界規模で言語教育を見ると、1960年以降、認知心理学の進展と生成文法の発展という波に乗り、理論・実証研究が急速に進歩を遂げ、ちょうど日本の英語教育と同じくして1990年代に変革期を迎えている（Rivers（1992）を参照）。

本論では、このような変革期に大学に入学してくる学生の英語教育を取り巻く状況を概観し、最近の言語教育の理論を参照しつつ、大学英語教育における言語理解の方法について模索する。ここでは、日本の英語教育にはスキーマを意識的に利用した学習が必要であると主張し、メディアを活用した授業形式を検討する。そして、このような授業形態が言語教育の理論にどのような意味を持つかについて議論する。

以下、第2節では、大学生の英語力の背景を概観し、その問題点を明らかにする。第3節では、最近の言語教育に関わる理論を概観し、前節の問題点の分析とスキーマを活用した英語教育を提案する。第4節では、授業の実践報告、第5節では、アンケートに基づく授業の評価を行う。第6節では、ここで提案する授業形態と、その評価が持つ理論上の意味を論じる。

2. 大学生の英語力とその背景

この節では、大学生のアンケートに基づく英語教育の背景、TOEFL（Test of English as a Foreign Language）の試験結果に基づく英語力の評価、大学の授業からの観察を順に考察する。

2.1 中学校・高等学校の英語教育

1989（平成元）年に改訂された文部省の学習指導要領では、中学校、高等学校において、オーラルコミュニケーションの重視が唱われた。中学校では「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことが目標とされ、1993（平成5）年にその改訂版が施行された。高等学校では「オーラルコミュニケーション」という科目が新設され、1994（平成6）年度から開講されている。

したがって、1997（平成9）年以降から大学に入学した現役生は、高等学校でこのオーラルコミュ

*本論は、1999年8月10日に日本教育会館で行われた日本医学英語教育研究会・第二回学術において口頭発表された原稿の一部を大幅に改訂したものである。

旭川医科大学医学部英語 hnaito@asahikawa-med.ac.jp

ニケーションを学習していることになり、1999（平成11）年以降の新入学生からは、中学校から高等学校まで、オーラルコミュニケーションを重視した授業を受けていることになる。実際、中学校では約7割、高等学校でも3割近くの英語教員がコミュニケーション重視の授業を展開しているとの報告もある（新里（1999）を参照）。

しかしながら、このようなコミュニケーションを重視した学習指導要領の下で授業を受けてきた学生の実感は、その目標と大きく異なっていることが、現在大学に在籍する学生のアンケート調査から浮き彫りになっている。

アンケート調査は、1999（平成11）年4月に、授業を担当する当大学医学科1年生（60名）と看護科2年生（63名）を対象にして実施した。質問は、高等学校の英語教育で履修した科目ではなく、高等学校の英語教育で学習が重視された科目について尋ね、複数回答可で行ったところ、次のような結果が得られた。英文法という名称の科目は設置されていないが、「英文法を中心とした授業」と回答する学生を考慮し、一つの項目として独立させてある。

高等学校で重視された英語教育（医学科60名、看護科63名）

	リーディング	英 文 法	ライティング	オーラルコミュニケーション	そ の 他
医学1年	60名	32名	25名	10名	0名
看護2年	52名	47名	21名	9名	2名

リーディングが重視されたと答える学生は、医学科で100%、看護科で82.5%を占めていて、ほぼすべての高等学校が読解中心の授業を行っていることが分かる。次いで割合が多かったのは、英文法で、医学科で53.5%、看護科ではさらに多い74.6%であった。英文法の暗記形式がつまらなかったと感想を漏らす学生が目についた。ライティングについては、医学科で41.6%、看護科で33.3%と意外と低い数字で、書く能力については重視する高等学校が少ない傾向がある。学習指導要領で重点目標とされているオーラルコミュニケーションについては、医学科が16.6%、看護科が14.2%にとどまり、合わせても15.4%にしか過ぎず、上述した「高等学校でも3割近くがコミュニケーションを重視」という報告を大幅に下回っている。その他としては、洋楽による英語の授業、英単語の暗記を中心とした授業を受けたとする看護科の学生が合計2名いた。

在籍当時、大半が学習指導要領でコミュニケーション重視が唱われていない時期の英語教育であるが、同様の質問を中学校の英語教育に対しても行ったところ、以下のような結果になった。

中学校で重視された英語教育（医学科60名、看護科63名）

	リーディング	英 文 法	ライティング	オーラルコミュニケーション	そ の 他
医学1年	52名	27名	8名	7名	1名
看護2年	52名	42名	6名	6名	3名

リーディングが、医学科で86.6%、看護科で82.5%、英文法が、医学科で45.0%、看護科で66.6%と、高等学校と同様に中学校においても読解中心の授業が目につく。ライティングは、高等学校よりさらに重視される学校が少なく、医学科で13.3%、看護科で9.5%である。オーラルコミュニケーションについては、高等学校よりわずかに少なく、医学科で11.6%、看護科で10.0%となった。その他では、英語を重点的に学習しなかったという学生が医学科で1名、音楽を使った授業という学生が看護

科で3名いた。

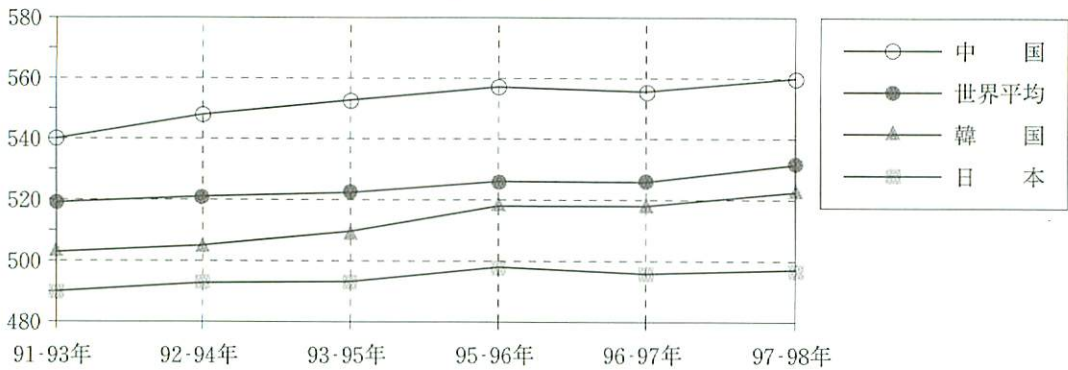
中学校・高等学校を通して概観すると、学校における英語教育は、英文法を暗記し、英語を日本語に訳す授業が中心に行われているようであり、ライティングも英文法の暗記の延長線上の演習にとどまり、文字を使わないスピーキングはもちろんのこと、リスニングを学習している学生は少数のようである。

2.2 TOEFL の試験結果

北米の大学への留学能力試験である TOEFL (Test of English as a Foreign Language) は、世界中からの受験者があり、試験データを公表していることから、しばしば話題となる。ここでは、比較されることが多い、中国、韓国と日本の試験結果を対照しながら、日本の英語の状況を概観する(宮原 他(1997)を参照)。

図1は、年別、各国の TOEFL 試験総点の得点分布である。

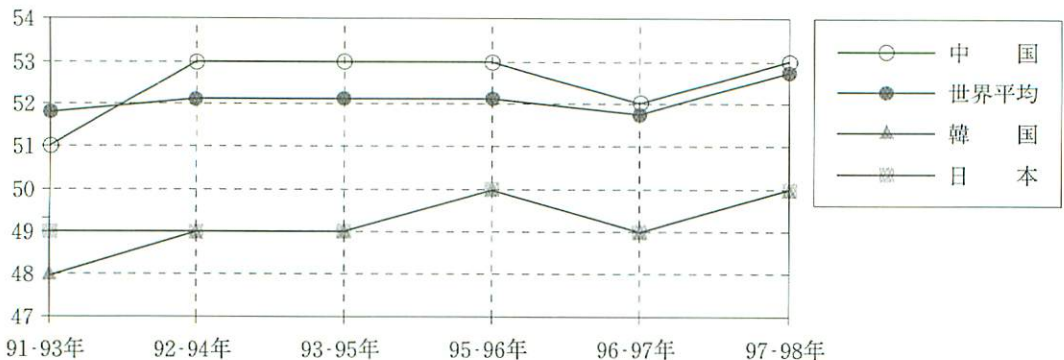
図1：Total Score



グラフによると、1991-93年の平均得点順位、中国、韓国、日本の順序は、1997-98年まで変わらず維持され、中国だけが、いずれの年も世界平均を上回っている。特徴としては、中国に対する日本と韓国の差は歴然としていること、また、1991-93年にはわずかであった日本と韓国の差は、年を追うごとに差が大きくなり、韓国が世界平均に近づいていることが分かる。

図2は、日本人が苦手と一般的に言われているリスニングの分布である。

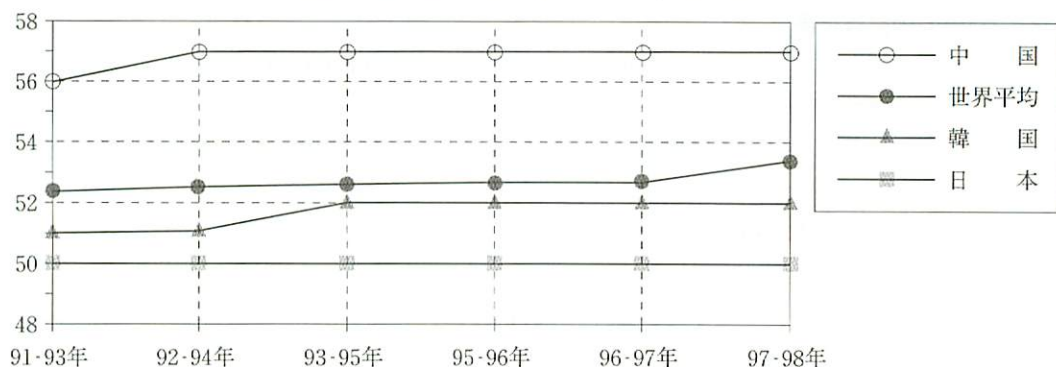
図2：Listening Comprehension



リスニングに関しては、1991-93年の時点では、日本が韓国よりも1ポイント上回り、中国も世界平均を下回っている。1992-94年以降は、中国が世界平均をわずかに上回り、日本と韓国は同じポイントを重ね、世界平均よりも大きく下回っている。

図3は、いわゆる文法問題である。

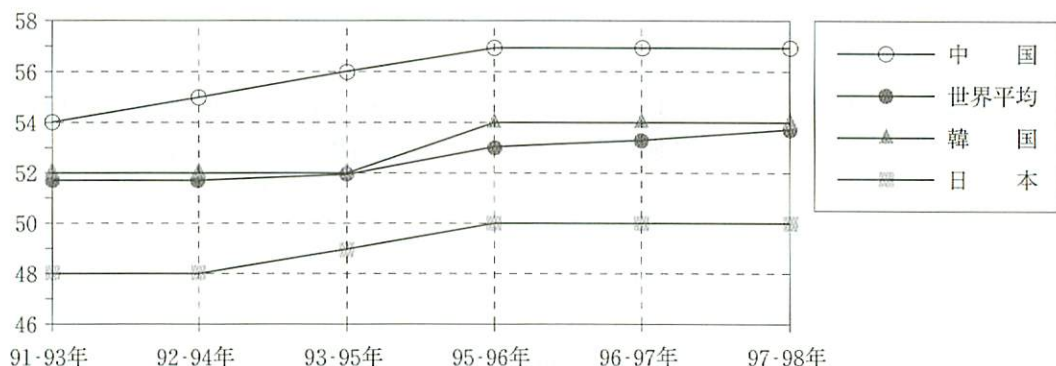
図3：Structure and Written Expression



1991-93年に始まり、1997-98年まで、中国、韓国、日本という順序は変わらず、韓国と日本が世界平均を割っているのに対して、中国が高いポイントを記録していることが分かる。また、当初近似していた韓国と日本の差も93-95年以降は水を空けられた形となっている。

最後に、図4は、リーディングに関する問題の試験結果である。

図4：Reading Comprehension



1991-93年から1997-98年において、このリーディング部門で世界平均を大きく割り込んでいるのは日本だけで、韓国は毎年わずかながら世界平均よりも高いポイントを示し、中国は常に高いポイントを維持している。

以上の分布から、中国がすべての部門において高いポイントを得て、日本と韓国を毎年大きく引き離している。日本と韓国を比較すると、両国はリスニング部門がほぼ同じスコアであるのに対し、リーディング部門で韓国が大きくリードし、両国の差は安定している。文法部門では、韓国が年々日本を引き離し、全体としては、それが日本と韓国を引き離す要因となっている。

前節で考察した日本の中学校、高等学校の英語教育では、リーディングと文法に重点が置かれてい

ることを指摘したが、皮肉にもその部門に関わる TOEFL のスコアが韓国にさえ大きく引き離され、世界平均を大きく割り込む結果になっている。韓国語が日本語と語順を始めとした統語上の性質が極めて類似することを考えると、教育上の問題がこのような差を導き出していると言える（宮原(1997)を参照）。

さらに、世界平均と比較してみると、リスニング部門が2.1-3.1ポイント（平均2.6ポイント）、文法部門が2.4-3.3ポイント（平均2.75ポイント）、リーディング部門が2.9-3.7ポイント（平均3.4ポイント）と、それぞれ下回っていて、中学校、高等学校であまり重視されていないリスニング部門が世界平均に一番近く、最も力の入れているリーディング部門が世界平均よりも大きく下回っている。

2.3 大学の授業

過去4年間、担当する授業においては、英語を逐語訳せず、大意把握を中心に据えたパラグラフリーディングを行った。その授業を進める中で、いくつか気になることが観察された。

リーディングをするときに学生にとって見知らぬ単語が登場すると、「分からない」と答えて解釈することを放棄する学生が非常に目に付く。単語の意味を、前後関係、文脈、文章全体からから類推することはほとんどない。それでも、その「分からない」単語の日本語訳を教えると、文全体の訳読ができる。全般的傾向として、英単語すべてに日本語が対応していないと安心して英文が読めないようである。

文単位ではなく、段落全体の要旨について尋ねた場合、大半の学生が段落全体を訳読し始める。訳読を終えた時点で再び段落の要旨を尋ねても、返答を得るにはかなりの時間を必要とする。その多くは、最終的に、実は意味がよく分からないと答える。

リーディングの授業だけでなくリスニングの演習を行う授業においても、気になる一つの傾向がある。演習当初は、既に述べたように、中学校、高等学校において訓練をしていない学生が過半数以上を占めるため、英語の音そのものに慣れず、音を拾うことができない。それでも、回数を重ねることではほとんどの学生は、単語を聞き分ける段階まで到達する。この段階まで到達した学生に観察される現象は、単語一つ一つをかなり正確に識別することができても、耳にする英語の文章が全体で何を表しているのかについてほとんど把握できないことである。

2.4 分 析

文法とリーディング重視の中学校、高等学校の英語教育、その成果が十分に現れない TOEFL の試験結果、大学での授業の様子を総合的に分析すると、学生の問題は、英語で書かれている文章を文法に当てはめてパズルを解くかのように日本語に訳読することはできても、英語から意味をくみ取り、理解することが極めて不十分であることと考えられる。

中学校、高等学校の英語教育に関するアンケートで、自由に感想を述べさせた箇所では、教科書を丸暗記するだけでテストの成績が取れたと述べる学生が少なからず存在した。これは、英語教育が言語の訳読に重点が置かれ、解釈や理解が不十分であることの一面を物語る。また、言語の理解力が不足しているならば、理解度を確認する TOEFL のような試験で得点できないこと、大学の授業において言語理解を必要とする課題を学生に与えても時間がかかるか、放棄することも、自明のこととして納得することができる。

それでは、言語情報を理解することには、どのようなプロセスが関わり、言語理解力の欠如がどのような影響を与えるのかについて、理論的側面からさらに分析を行う。

3. 理論的背景と分析

3.1 言語理解のシステムと言語習得のモデル

言語処理のプロセスにおいて、言語のインプットの段階では、リスニングが聴覚的識別、リーディングが視覚的識別をそれぞれ必要とし、物理的識別方法が根本的に異なる (Rost (1990) を参照)。その結果、リスニングの場合、話者によって発音が異なる、不規則に休止が入る、躊躇、誤り、訂正があるなど、テキストをインプットする時点でリーディングよりかなり負荷が大きい。さらに、テキストを処理する際に、リスニングでは、情報が時間軸に沿って一定方向に流れるため、時間的に制限された中で処理することが強いられ、視覚的に内容を再確認することも不可能である。

このように識別方法に違いがあるものの、リスニングとリーディングは、スピーキングとライティングのような生産的 (能動的) 言語行為に対して、いずれも受動的な言語行為として分類がされてきた。1960年代以降、研究の対象は、言語の識別方法からさらに踏み込んで、言語の理解にまで至る心的プロセスの解明に移った。当時、認知心理学の目覚ましい理論的進展があり、言語習得における理論への応用が試みられ、一定の成果を上げてきた。その中で、リスニングとリーディングには、言語の識別を受動的に行うだけでなく、既知の情報を利用しつつ推論し、新たな言語情報を参照しつつ、修正、確認などの作業を行う、かなり複雑な心的プロセスが働いていることが解明されてきた (リスニングについては Rubin (1994)、リーディングについては天満 (1989) を参照)。このような複雑な心的プロセスに関わっているのがスキーマと呼ばれる、過去の経験と知識を基にした心的枠組みである。我々は、新しい言語情報を与えられると、スキーマに基づいてその情報の意味するところや表すところを予測、類推する。その言語処理のプロセスの中で情報と推論の間でこすり合わせが行われるが、その心的作業の結果言語理解が得られる。このように、現在では、言語を理解するためには、言語に関する知識 (統語、意味、音韻に関わる言語システム) のみならず、スキーマによって左右される認知プロセスが大きく関連していると考えられている。

リスニングとリーディングにおける言語理解には、共通してスキーマが重要な意味を持つとする理論は、それぞれ独立した実証的研究によって確かめられてきたが、両者にどのような相関関係が存在するかについては、研究が進められなかった (Anderson and Lynch (1986: 14))。両者の関係についての研究としては、Neville (1985) が、小学生の母国語に関する調査をし、良い聞き手は通常良い読み手であり、乏しい聞き手は一般的に乏しい読み手であるという一般化を導き出した。第二言語に関する研究では、Brown and Hayes (1985) が第一言語と同様の結果が第二言語にも一般に当てはまることを検証した。さらに、Cole and Jakimik (1978, 1980)、Garrod (1986)、Neville (1985) などによって、リスニングとリーディングでは、いずれも同様のスキーマを用いて理解に至っていることが確かめられている。Anderson and Lynch (1986: 17) は、リスニングとリーディングの運用に影響を与えるような言語プロセスの一般的技術が存在すると論じ、効果的にリスニング力を向上させることが、リーディング力を向上させることにつながる可能性を示唆している。

このように1960年代以降、言語理解のシステムについて、理論的、実証的研究が大きく前進する一方で、言語習得に関する理論も進展した。言語習得のモデルで最近の研究で大きな影響を与えてきているのが、Krashen (1985, 1992) のインプット仮説である。この仮説によると、言語習得で重要なのは学習者が適切な言語材料をインプットすること、すなわち聞くこと、読むことを集中的に行うことである。この聞くこと、読むことが基礎的な技術となつて、書くこと、話すことの技術が向上するとされている。Krashen は、この仮説が第一言語のみならず、第二言語にも適用されると主張し、賛否両論があるものの、その大筋は現在受け入れられている。

言語理解のシステムと Krashen の仮説を考え合わせると、リスニングは、その認知過程がリーディングに影響を与えるだけでなく、スピーキングの基礎的技術となることが分かり、言語の習得、学習上、重要な位置を占めるようになっている。

3.2 日本の英語教育：理論的分析

日本の英語教育を考えると、2.1 節で概観したように、授業の形態はリーディングと文法がかなりの割合を占めている。そのような背景があるため、日本人の英語学習者の大半がリスニングよりもリーディングを得意としている。これはリスニングがリーディングに良い影響を与えるという諸外国の第二言語学習者に広く観察される現象とは逆行する。この現象は Brown and Hayes (1985) によって報告され、Anderson and Lynch (1986: 18) では諸外国の大方の習得過程とは異なる特殊な現象として扱われている。

ただし、日本人がリーディングが比較的得意だとしても、言語の理解度を計る TOEFL の試験では良い結果を生み出していないことは既に述べた。言語習得理論とスキーマに基づく言語理解を考慮し、その原因を分析すると、リーディングに成果が現れない日本人の英語の認識作業では、統語、意味、音声に関する言語的知識に関しては十分な情報を得られたとしても、スキーマに基づく知識を利用して得られる情報を十分に活用していないと思われる。言語理解が、言語自体の知識だけでなく、スキーマを利用するなどした認知作用に基づく知識の総体として成立することを考えると、このような弱点を持つ日本人は、言語材料に対する理解に到達していないとの分析が可能である。TOEFL のように時間的制限を受ける試験においては、言語知識を活用して日本語に解説し、日本語の知識から理解するのは、時間的にかなりの無駄があると言える。結果、時間的に不足するなどして、高い得点をマークすることが不可能になる。

担当授業において観察された類推能力の欠如や文章の把握する力が劣っていることも、学生がスキーマを利用した理解をしていなければ、しごく当然のことである。未知の英単語を類推する方略を持ち合わせず、テキストの情報から新たにスキーマを再構築する作業をしなければ、言語知識によって日本語に訳すことができても、理解に基づいて自分の言葉で答えを導き出すことはかなり困難な作業といえる。

言語材料を見聞きすることが、生産的言語活動の基礎であり、スキーマに基づく推論、そして確認の一連の作業が言語の理解において必要不可欠であるならば、その認知作業に関わる一連のプロセスを日本人の英語学習者に意識的に訓練することが必要となる。ここでは、リスニングがリーディングに良い結果をもたらすという従来の研究と、日本人の英語学習者の場合、リーディングの方が比較的得意とするという事実を踏まえて、言語理解の認知に関わる技術の向上を試みる。

4. スキーマを活用した授業

授業は、医学科 1 年生、60 名（2 クラス）を対象とし、60 分授業を週一回で合計 15 回行った。以下では、推測→ビデオ視聴→読解演習→ビデオ視聴という流れで行う、ビデオを補助教材としたリーディングの授業と、授業終了時点で無記名で行われたアンケート調査に対する学生の反応を参照し、授業の様子と結果を論じる。

4.1 教 材

Krashen (1985, 1992) によると、インプットとして与えるべき言語材料は、学習者の必要性を満

たし、学習者のレベルに合致した、適切なものが学習効果を上げるために必要となる。残念ながら、既存の教科書の多くは、このインプットとしての適切性にかなうと同時に、学生の知的好奇心を満たし、学習の動機付けを与えるものは数が少ない。さらに、教材に真正性 (authenticity) を持たせるとなると、選択肢は少なくなる。

Ur (1984), Rubin (1995) では、最新のメディアを利用した教材が有効であることが示唆されているが、ここでは学生にとって馴染み深いビデオと興味関心があるインターネットを利用して教材を集めた。ビデオは、授業日からさかのぼって約2週間以内にNHK衛星放送で放映されたアメリカABC Newsの中から医学・健康分野を録画して視聴覚教材として用いた。また、インターネットからは、ABC Newsのホームページから放送に対応した関連記事を取り出してリーディングの材料とした。

4.2 推 測

授業ではまず初めにその日に取り上げるABC Newsの放送、記事のヘッドラインだけを提示する。ヘッドラインは、性質上簡略化した形の英語であるために字義についての正確な理解が必要となる。その理解を踏まえて、学生自らが持つ既知情報を基にヘッドラインが付された記事全体についての内容を推測する。これは、リーディングとリスニングによる言語理解では欠かすことのできないスキーマの活用を意識的に行い、技術を身につけることを目的とする。ヘッドラインの推測は、クイズの要素を持つために授業の導入としてクラス全体の雰囲気作りにも効果がある。

ただし、多くの学生がこのような作業に慣れないために、何をすべきかについて戸惑い、練習の意義について疑問を抱くので、動機付けを与えることと、グループによる作業が肝要となる。

動機付けとしては、将来臨床医学を学ぶ上で必要となる医学論文の調査や検索において、題名から論文の内容をある程度把握して取捨選択をすることが欠かせないこと、インターネットの新聞、医学関連情報を入手する際に、多くの場合、文書全体を開く前に題目から選別する必要があること、週刊誌の広告に象徴されるように、日本語においてもヘッドラインから記事内容がかなりの割合で類推できることを具体例として提示する。

ヘッドラインの推測に慣れてない、あるいは既知の情報が学生により差異があるなど、学生に推測する能力にかなりばらつきが当初見られるので、数人のグループに分け、情報を交換する。回数を重ねることである程度この技術を身につけてくるので、自力で作業を行い、最終的にクラス全体で情報を共有するなどの手順を踏む。

4.3 ビデオの視聴

次の段階では、アメリカABC Newsの放送を録画したビデオを学生に提示する。この学習の目的は、前段階で行ったヘッドラインからの推測について、ビデオから流れる画像を手掛かりとして確認、修正を行い、次の段階に向けてのより精緻なスキーマの構築を目指すことである。

ビデオは、学生にとって慣れ親しんでいる媒体であること、推測だけではあまりに漠然としていた理解を視覚化することで記事内容に対するイメージが一層鮮明になるなど、リスニング力が初級段階にある学生でも抵抗が少なく作業を進めることができる利点がある。リスニング教材としてニュース番組を用いることは、発話情報の密度が他の分野に比べてかなり高いこと、音声情報と映像情報の内容が乖離している場合がしばしばあるなどの理由で、初級、中級レベルの学習者には不適であるとの意見もある (Rubin (1995) を参照)。これらの問題は、リスニングそのものを目的とせずスキーマ構築の手段とすること、さらに映像が豊富かつ関連性が強い報道を選ぶことで回避している。

この段階で学生に与える課題は、前段階で大きく膨らみ、内容が多岐に渡っている推測の中から、実際に報道されていることが推測のどの部分に的を絞ったものであるかを確認すること、さらに推測に至らなかった内容を大まかに拾うことである。

学習が進むに連れ、ニュースの形式に慣れ、映像情報だけでなく、音声情報についても関心を寄せ、理解をする学生が出てくる。ニュースの録画映像を使うことは、そもそもリスニングに関してはかなりレベルが高い内容になっているので、上級レベルになった学生に対しても学習意欲を失わせないという利点もある。

4.4 リーディング

第三段階では、ABC News のホームページから取り寄せたニュースに対応する文書をコピーして、学生に配布する。作業の目的は、推測から導き出した事前情報と、ビデオ視聴によって修正、確認し、新たに得た情報を用いて、リーディングをする際にイメージを膨らませつつ記事の内容を理解することである。

中学校、高等学校で学習済みの英語を日本語に置き換える解読作業は、英語から直接理解する際のスキーマ活用の障害となる可能性があるので、ここでは一切行わない。演習としては、スキーマを正しく活用しているかを確かめる課題を与える。具体的には、各段落の内容を大まかに把握すること、そしてそれが前段階での情報とどのような関係にあるかを確認することを求める。この段階での注意点として、学生が英語を日本語に解読し、日本語によるスキーマを通じて理解する作業を行うことを防ぐため、作業時間を短く設定し、英語から直接理解するよう心がけさせることが大切である。

最終的には、未知の単語、段落の要旨、文全体の構成などに関する確認を行い、ニュース内容全体の完全な理解をする。理解度の確認作業に当たっては、理解したことがらを英語で表現することが望ましいが、上級に達していない段階では、たとえ英語からの理解で構築したスキーマであっても英語で表現することは難しいので、理解度を正確に計るためにも日本語で確認することから始める。

4.5 ビデオ

授業を閉じる最終段階として、第二段階で視聴したビデオを再び視聴する。その目的は、これまでの作業で十分に理解したニュース記事について確認と整理を行うこと、そして音声に意識を傾けてリスニングの向上の手掛かりを見つけることである。この時点では、スキーマの構築、内容の把握などの認知過程が既に終了しているので、音声に集中することができるという利点がある。既述の通りにニュース英語の音声上は密度が濃くて理解が困難とされるが、「理解」という作業をリーディングで終えているので、キャスター英語、インタビューの英語、レポーターの英語などと多種多様な英語を純粋に音として触れる絶好の機会となる。

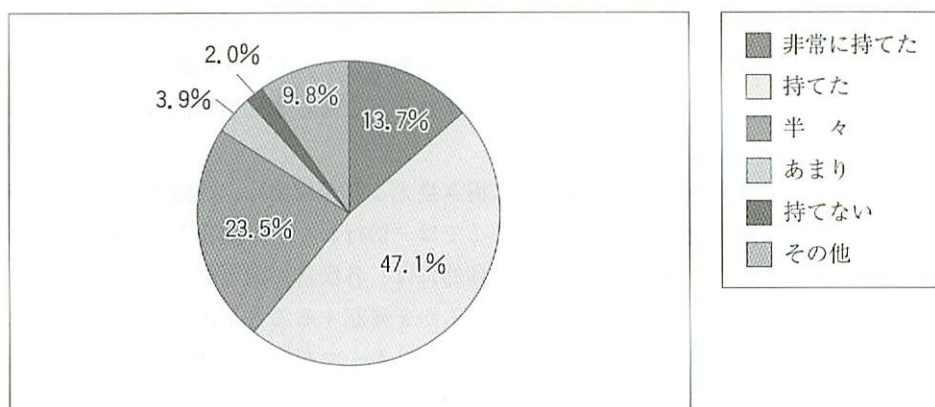
5. 結 果

スキーマの構築に基づく言語理解の欠如がリーディング力が低迷する原因だとする3.2節の分析に基づいて、第4節のような、ヘッドラインからの推測、ビデオによるイメージの明確化、文字情報による確認、ビデオ視聴によるまとめ、という一連の流れで授業を行った。その各段階に関連する事項について、授業を受けた学生医学科1年生60名を対象にアンケート調査を行った。そのうち51名の学生から寄せられた回答の結果は次の通りである。

5.1 教材

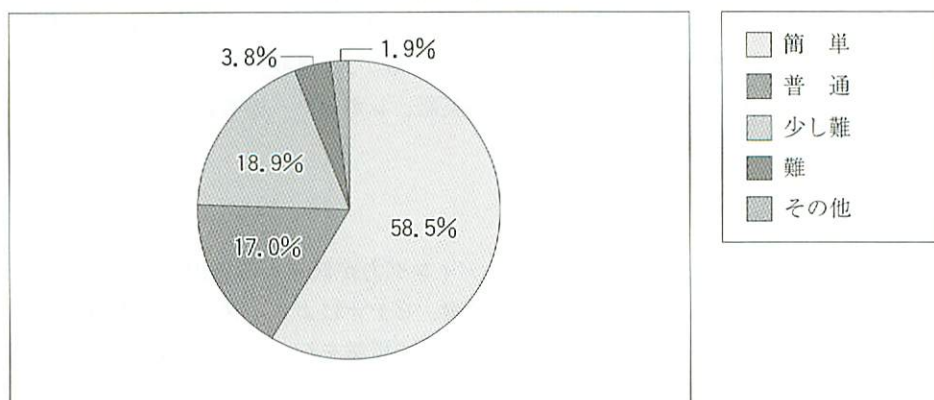
教材に関しては、非常に興味を持てたとする学生が7名、興味を持てたとする24名と6割に達した。興味があると答えた学生は、その理由として、自分の知らない情報があったこと、他の科目の授業内容に沿う形の記事があったことを上げている。興味は半々とする学生は12名で、取り上げる記事の内容によって興味にばらつきがあると回答している。あまり興味が持てない学生は2名、興味が持てない学生が1名いたが、医療関係の話題よりも、娯楽などの分野の記事の導入を希望していた。その他は5名で、無回答、英語の学習自体に興味がないなどの意見が寄せられた。

図5：教材に対する興味



取り扱う教材の難易度、レベルに関するアンケートには、簡単と答える学生が1名、丁度良いと答える学生が31名いた。これはおよそ6割に達する。少し難しいが9名、難しいが10名と合わせて4割弱の学生が答えたが、その約半数がリスニングの難しさを上げ、リーディングは丁度いいレベルであると答えている。残りの半数については、難しいが大学生にとって必要なレベル、学習不足が原因に過ぎないなど、授業のレベルを下げることを希望するものはいなかった。その他の2名は、授業中の一連の作業を60分間で行うには時間が足りないとの回答であった。

図6：教材の難易度について

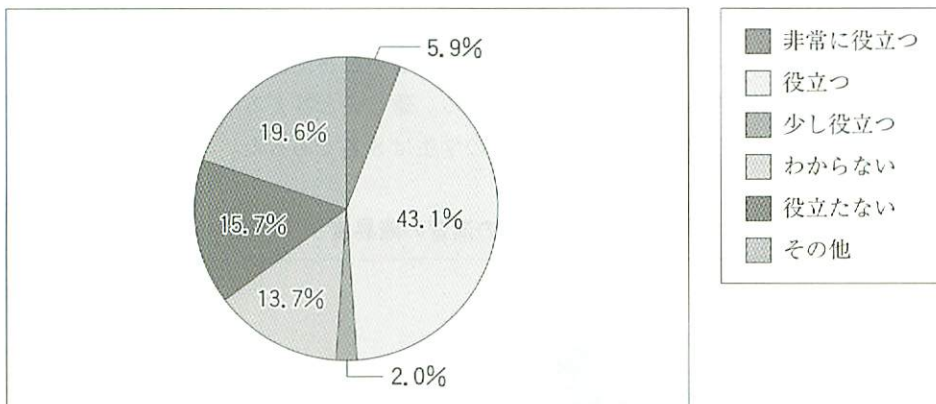


このような結果から、テレビの放送英語というかなりレベルの高い内容で授業を進めているにもかかわらず、教材そのものについての不満は少なかったことが分かる。逆に、学生の個別面談によると、レベルのさほど高くないテキストを使った授業では知的好奇心を満たすことができずに学習意欲が減退するので、レベルは下げないで欲しいとの希望があった。したがって、高いレベルの教材のアプローチを工夫することで、多くの学生を授業に参加させることが妥当であると考えられる。

5.2 推 測

授業の最初の段階で行われるヘッドラインの推測が理解をする上でどのような効果があったかを尋ねたところ、非常に役立つが3名、役立つが22名いて、少し役立つの1名を合わせると、半数が好意的な回答をしている。その中では、回を重ねるごとに推測の仕方が分かった、今まで考えたことがなかったのだおもしろいなどの意見があった。逆に、推測が役立つたないとの回答が8名いた。その理由としては、そもそも推測が巧くできない、推測を誤ると理解の障害になるなどの回答が寄せられた。分からない7名は、推測が効果があることを確かめることができない、という回答であり、その他の10名は、推測段階で周囲やクラス全体の意見交換が時間的に無駄である、この時間帯は眠たくなる、推測してしまうと教材を見るときの興味が薄れる、無回答であった。

図7：推測は理解に役立つか

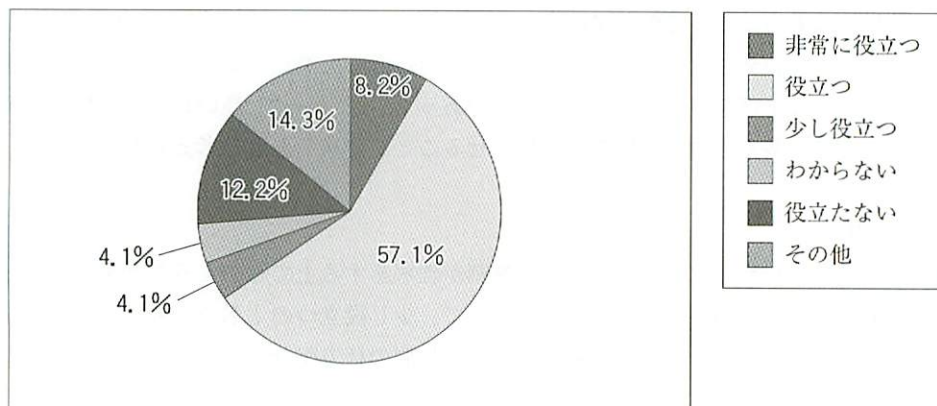


スキーマの構築と活用という観点から見ると、推測ができない学生、そしてスキーマの修正が困難な学生の技術の向上、効果の分からない学生の自覚が今後の課題となる。

5.3 ビデオ

ビデオは理解する上で役立つかについての質問には、非常に役立つが4名、役立つが28名、少し役立つが2名と好意的な回答を出したのが、全体の約7割を占めた。これは推測の49%よりも高い数字で、推測よりもビデオの方が役立つと答える学生が数名いた。効果が分からないとした学生も2名のみで、推測の分からない7名よりも少ない数字で、ビデオの活用の方が、効果を自覚する学生が多かったことが伺える。役立つたないという学生は6名いて、眠くなる、つまらない画像だ、英語が早すぎるなどの回答であった。その他の7名は無回答であった。

図8：ビデオは理解に役立つか？

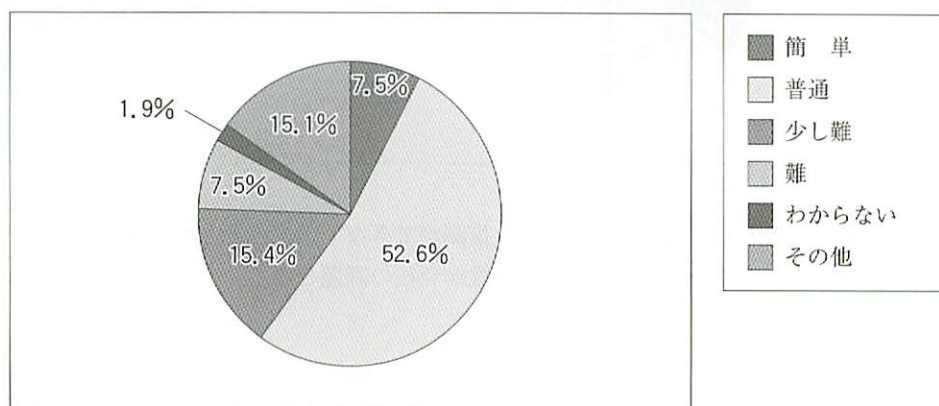


以上の結果から、ヘッドラインからだけの推測というイメージが沸きにくい方法に比べ、ビデオの場合は視覚的に確認できること、慣れ親しんだメディアであるということからも好評だったことが分かる。

5.4 リーディング

ヘッドラインの推測とビデオ視聴の後に行ったリーディング演習に関しては、簡単だと答えた学生が4名、普通、丁度良いという学生が28名いた。多少難しいと答えた学生は8名いたが、単語のレベルの高さ、演習の時間の短さを理由として上げている。難しいと答える学生は全体の1割を切る4名であった。分からないとする学生は1名、無回答の学生は8名であった。

図9：読解の演習の難易度

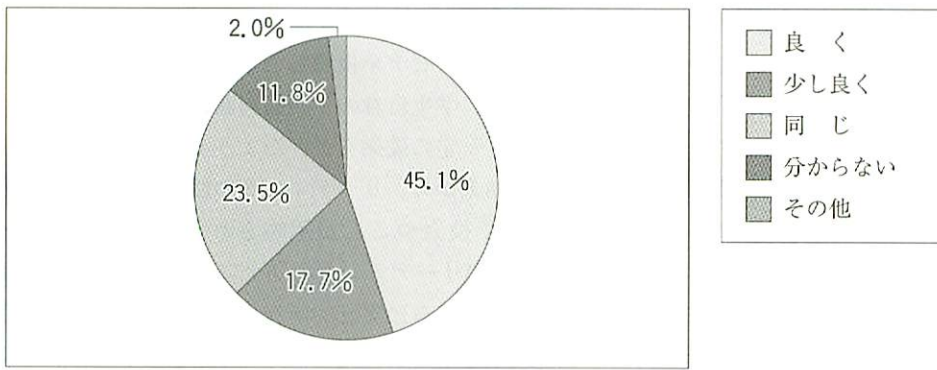


教材そのものの難易度についてのアンケートと比べた場合、簡単、あるいは普通と答えた学生は、ほぼ同じく60%であった。リーディング演習において簡単と答えた人が増えた分、普通と答える学生が減っている。また、教材について、難しい、少し難しいと回答した学生が36%であったに対し、このリーディングの演習では22%に減少していることなどからも、推測とビデオ視聴の結果、文章を理解しやすくなった学生が増えてきていることが分かる。

5.5 ビデオ

最終段階の整理、確認を兼ねるビデオを見た結果、ビデオの理解度がリーディング以前とどのように変わったかについて行ったアンケートによると、理解度が良くなったと答える学生が23名、少し良くなったと答える学生が9名と、全体では6割を超える学生がリーディングがリスニングにとって良い結果になっている。その理由としては、音がはっきり聞こえるようになった、イメージが浮かびやすくなった、メリハリをつけて聞くことができたなどと答えている。変わらないと答えた学生は12名いて、その理由に、そもそも英語の単語が聞こえてこないなど、言語的知識の段階でつまづき、よい結果がでなかったとする学生が多かった。効果については、分からないと答える学生は6名、その他の無回答が1名いた。

図10：読解後ビデオの理解度はどう変化したか？

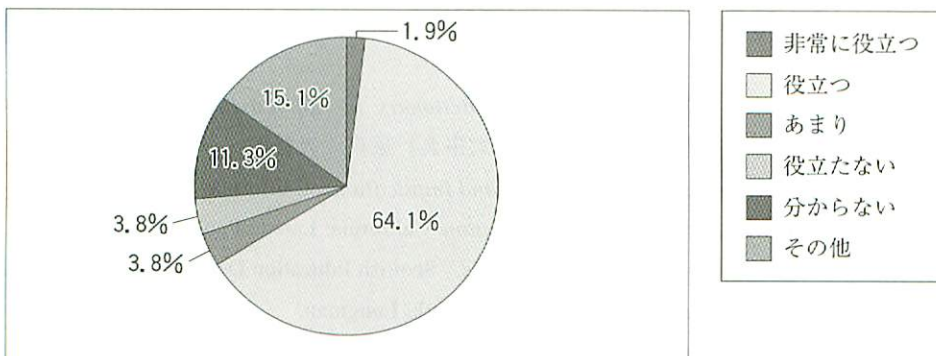


以上の結果から、リーディングの練習によって理解度を上げる作業を行うことで、リスニングの理解に直接効果が現れる学生が多くいることが判明した。と同時に、リスニングを学習の主目的にして外国語放送を用いるには、まだ学生のレベルが追いついていないといえる。

5.6 今後の学習への影響

この授業では、その成果を数字で確かめるために授業の前後に客観テストを実施する時間は残念ながらなかった。しかし、英語教育の一つの目標である、授業自体が今後の学習にどのような影響を与えたかについてのアンケートを行うことでその成果を確かめた。

図11：授業は今後の英語学習に役立つか？



その結果、非常に役立つは1名、役立つは34名、合わせて66%いて、その理由として、英語に対する抵抗感がなくなった、文法にこだわらない授業で新鮮だった、動機付けが与えられた、聞くことに対して抵抗がなくなった、聞くことを意識して日頃の学習を心がけるようになった、などと全体的に良い評価が得られた。一方、あまり役に立たない、役立つまいとする学生は、同数の2名で、全体に難しいこと、和訳をしない授業になじめない、予備校の方がリーディングの力が付いたとのコメントを回答している。その他の8名は無回答という結果であった。

6. まとめと理論的意味

本論では、大学生を取り巻く英語教育の環境、成績、授業の様子を考察し、そこから日本の英語教育で重点の置かれているリーディングの部門でも良い結果に結びついていないのは、言語理解が十分であると指摘した。そして、最近の言語習得理論を基にして、その言語理解の不足は、特に、スキーマを利用した認知的言語処理の過程が巧く行われていないことが原因であると分析した。その弱点を補うために、スキーマの利用を意識的に行う、推測、ビデオ視聴という学習項目を設けた授業を試みた。アンケート調査の結果、良好な結果が得られ、学生自身の主観的判断によれば、スキーマを意識的に構築利用することで、リーディングについて一定の成果を上げたようである。

また、ここでの分析と実際に行われた授業の結果から、リーディングの認知的言語処理技術を向上させることが、リスニングの際に理解する上で役立つことが示唆された。これは、Anderson and Lynch (1988) などが論じる、リスニングの向上がリーディングの向上につながるという仮説が、その逆も成立する可能性があることを意味している。さらに実証的研究が進み、仮説の正しさが証明されるなら、リスニングとリーディングには、同じような言語処理のパターンがあるだけでなく、相互に密接に関連する学習効果があることになり、リスニングとリーディングを相互利用した効果的学習方法の開発につながる。

参考文献

- Anderson, A. and T. Lynch (1988) *Listening*, Oxford: Oxford University Press.
- Brown, T. and M. Hayes (1985) "Literacy background and reading development in a second language," in T. H. Carr (ed.), *The Development of Reading Skills*, San Francisco: Jossey-Bass.
- Cole, R. A. and J. Jakimik (1978) "Understanding speech: how words are heard," in G. Underwood (ed.), *Strategies of Information Processing*, New York: Academic Press.
- Cole, R. A. and J. Jakimik (1980) "A model of speech perception," in R. A. Cole (ed.), *Perception and Production of Fluent Speech*, Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Garrod, S (1986) "Language comprehension in context: a psychological perspective," *Applied Linguistics* 7/3: 226-38.
- Johnson, K. and H. Johnson (1998) *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics*, Oxford: Blackwell Publishers. [岡秀夫 (監訳) 『外国語教育学大事典』東京: 大修館.]
- Krashen, S. D. (1985) *The Input Hypothesis: Issues and Implications*, California: Laredo Publishing.
- (1992) *Fundamentals of Language Education*, California: Laredo Publishing.
- Neville, M. (1985) "English language in Scottish schools," Scottish Education Department report.
- Rost, M. (1990) *Listening in Language Learning*, New York: Longman.
- Rivers, W. M. (1992) *Teaching Languages in College*, National Text Company. [上地安貞他 (訳) 『変革期

の大学外国語教育』東京：桐原書店.]

Rubin, J. (1994) "A review of second language listening Comprehension Research," *The Modern Language Journal* 78, 2: 219-240.

----- (1995) "The contribution of video to the development of competence in listening," in Mendelsohn, D. J. and J. Rubin (ed.) *A Guide for the Teaching of Second Language Listening*, California: Dominic Press.

TOEFL (1994) *TOEFL Test and Score Manual Supplement 1993-94 edition*, Princeton: Educational Testing Service.

----- (1995) *TOEFL Test and Score Manual Supplement 1994-95 edition*, Princeton: Educational Testing Service.

----- (1995) *TOEFL Test and Score Data Summary 1995-96 edition*, Princeton: Educational Testing Service.

----- (1996) *TOEFL Test and Score Data Summary 1996-97 edition*, Princeton: Educational Testing Service.

----- (1997) *TOEFL Test and Score Data Summary 1997-98 edition*, Princeton: Educational Testing Service.

----- (1999) *TOEFL Test and Score Data Summary 1998-99 edition*, Princeton: Educational Testing Service.

Ur, P. (1984) *Teaching Listening Comprehension*, Cambridge: Cambridge University Press.

Widdowson, H. G. (1983) *Learning Purpose and Language Use*, Oxford: Oxford University Press.

小池生夫監修 (1994) 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』東京：大修館。

天満美智子 (1989) 『英文読解のストラテジー』東京：大修館。

新里真男 (1999) 『21世紀の英語教育を探る：コミュニケーション重視の英語教育実現のために』神戸国際会議場シンポジウム。

宮原文夫、名本幹雄、山中秀三、村上隆太、木下正義、山本廣基 (1997) 『このままでよいか大学英語教育：中・日・韓3か国の大学生の英語学力と英語学習実態』東京：松柏社。